

研究専攻（専門領域）		日本・アジア研究専攻（日本語学）		学籍番号	06CS022
氏名	姜 洋	ローマ字	JIANG YANG	国籍 (留学生)	中国
修士学位論文名		中国語の結果動補構造に対応する日本語の表現形式			
提出年月日	2008年1月10日		指導教員	姫野 伴子	
体裁 (論文)	成果報告 56頁(1頁文字数約 708字)		言語	日本語（簡体中国語を含む）	
別冊添付資料等	実施アンケート調査票・調査データ				
キーワード	中国語の結果動補構造・結果補語・結果アスペクト・日本語の動詞の他動性調和の原則				
<p>本研究では、中国語の結果を表わす動詞を補足する構造を結果動補構造と呼ぶ。本研究の目的は中国母語話者の日本語学習者（以下、学習者と略す）が中国語の結果動補構造にあたる日本語をどう習得するかを明らかにし、教育現場に役立てることである。課題は二つある。i) 日本語の複合動詞が結果動補構造に対応する場合と対応しない場合の文法的分析。ii) 結果アスペクトの分析。研究方法として、二つの方法を採用。i) 書籍や文献による分析。ii) 学習者にアンケート調査を行う。</p> <p>本研究は先行研究を踏まえて、中国語の結果補語の境界を定めた。日本語の複合動詞の成り立ち方については、影山太郎氏の「動詞の他動性調和の原則」を支持する。</p> <p>文法構造分析を通して、動作と結果を表現するときの日中語の差異を明らかにした。中国語の結果動補構造は、結果補語が動詞か形容詞かによって、日本語の表現形式が変化してくるほか、日中語の動詞は性質が異なるため、中国語の「動詞+結果補語」という構造に比べ、日本語の表現形式はより多様になることも判った。さらに、中国語は基本的に孤立語系に属しているが、日本語のようにやや膠着語的な性格も結果動補構造の中に見られる。それは本来の語彙的意味を失い、前の動詞に付加することによって、動詞の結果が達成される瞬間を表す成分であり、本研究ではそれを結果アスペクトと呼ぶ。中国語は動作・行為と結果・変化が分離しており、付随する結果アスペクトがなければ、動作の結果が表せないのに対し、日本語は動詞が過去形を採用などによって、動作の遂行が表現される。</p> <p>アンケート調査を通して、学習者は動作に言及して結果を表す表現を選択し、動作を具体化しようとする傾向が強いことが判った。複合動詞を用いて中国語の結果動補構造を表現するとき、前項要素と後項要素との組み合わせ方について、全体的に、学習者の理解度が低い。また、日本語の複合動詞で表せない場合、いかなる形式で結果動補構造を表現するかについて、学習者はかなり混乱しているようである。それについて、学習者に訓練する必要があるのではないかと考える。</p> <p>日本語と中国語とは、各々独立した言語体系に属し、各自の特徴を持つことから、差異が出てくるのも自然なことである。文法構造上の異同を指摘することは、外国語教育に有益であろう。特に中国語母語話者の日本語学習者に提供する教科書をこの異同に合わせて作成し、日本語の複合動詞に関する特別訓練や他動詞の他動性と意志性の有無などの教育内容を入れれば、より自然な日本語を習得することに役立つであろう。</p>					